

土蔵に望楼のある船主の館

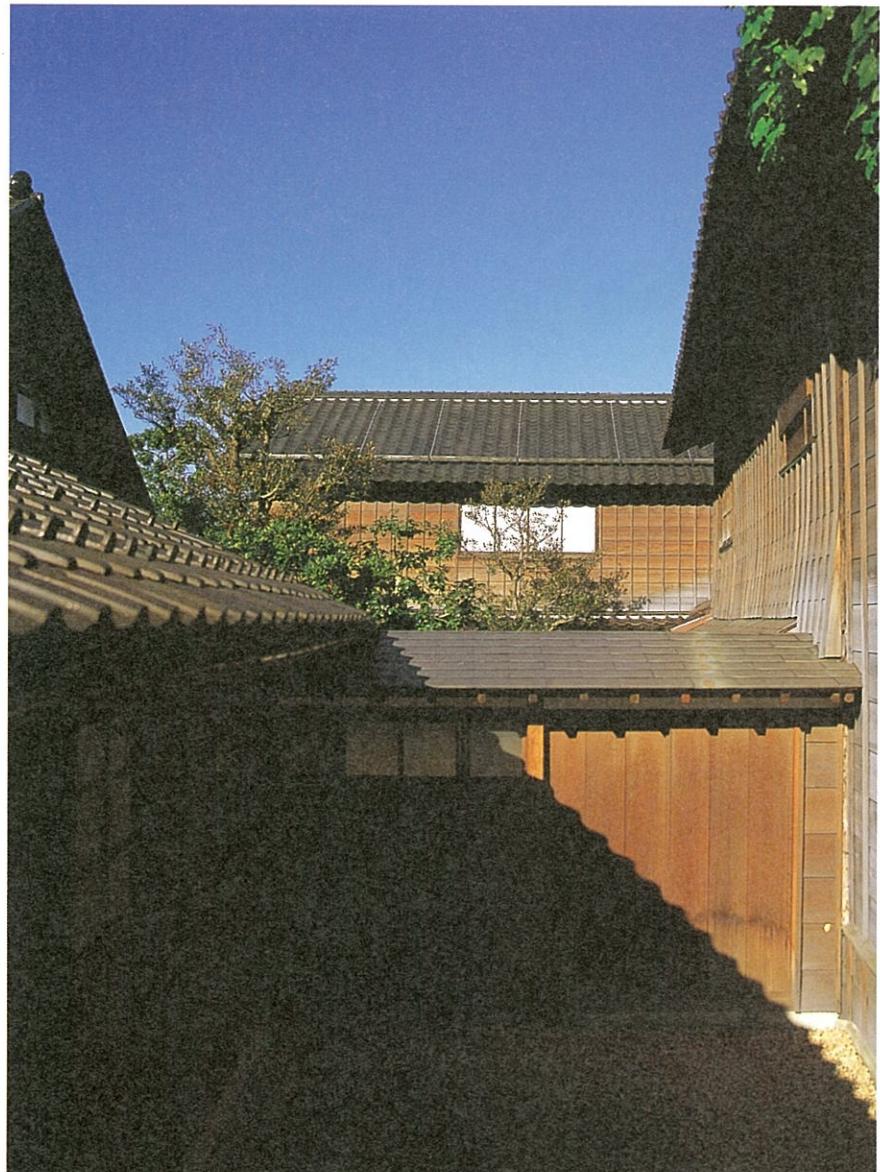
【秋元家】

秋元家は、代々廻船業を営んだ商家で、幕末には役人が伏木海岸視察の際に立ち寄るほどの家柄であった。そのとき2階から遠眼鏡で眺めたという記録もあり、現存する望楼との関係も興味深い。

建物は、明治20年(1887)の伏木大火の後に建てられたもので、屋敷は道路側の中央に主屋を配し、その奥に渡り廊下につないで衣装蔵と調度蔵、左側には庭園と米蔵があり、右側には台所棟がある。主屋の平面は間口11.6m、奥行15.9mで、部屋の配置は3列5段になっている。正面右側端に出入口を設け、玄関とミセ(商談などの間)を配している。左側は座敷や仏間、茶室などを配した来客用空間で、その奥が内向きの座敷などになっている。

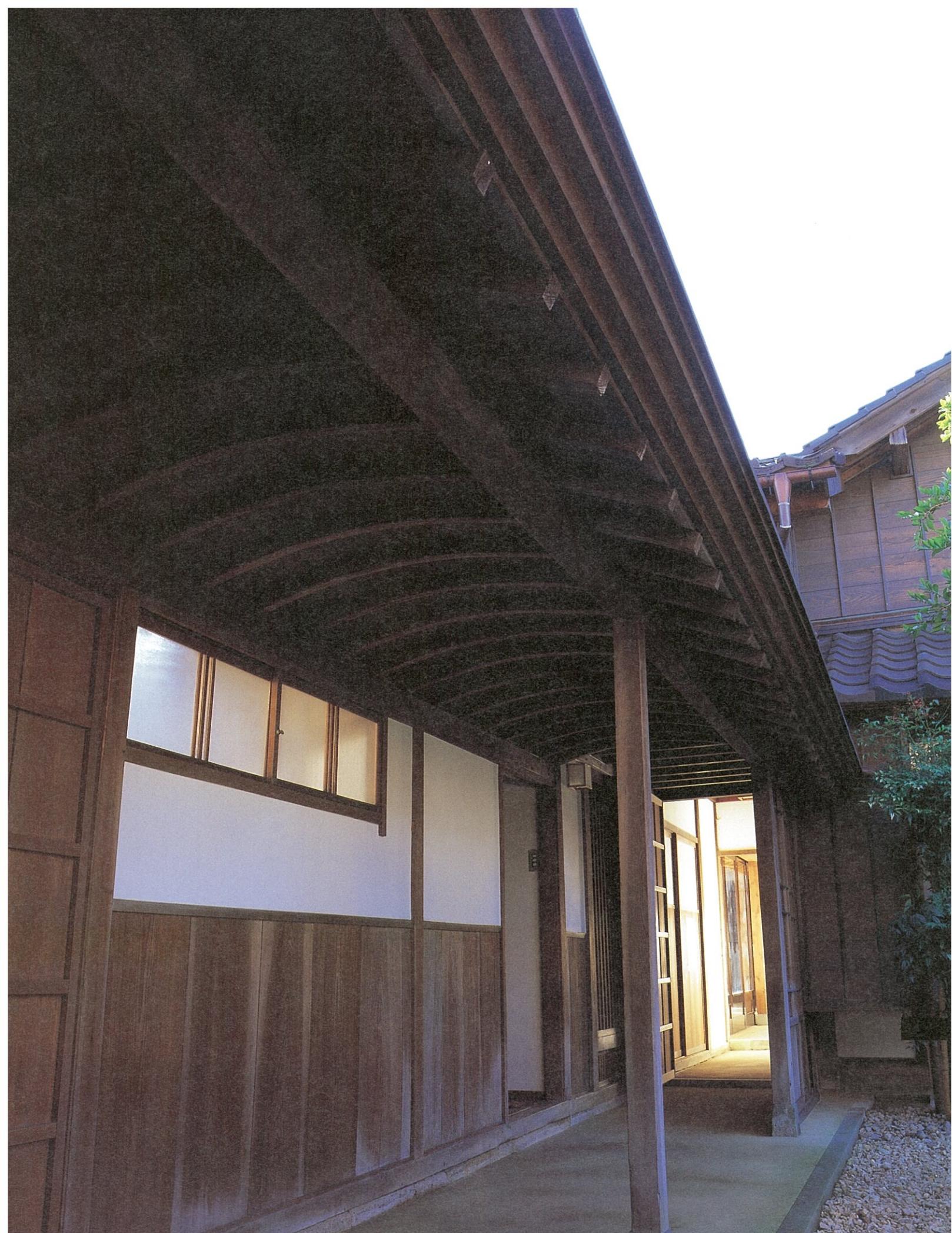
主屋は切妻・桟瓦葺きの大屋根で、玄関側には黒漆喰、庭側には白漆喰を塗って趣に変化を付けている。外観はつながる土蔵群なども含めて下見板張りで統一され、2階建て土蔵と主屋に囲まれた中庭は独特の雰囲気が漂っている。

建物で最も特徴的なのは土蔵で、衣装蔵と調度蔵の間には望楼があり、廻船業のシンボル的存在となっている。その構造にも特徴が多く、その意匠には財力と美意識が感じられる。また、望楼下の2階座敷や階段部にも工夫があり、その数寄的意匠には見所が多い。



主屋の東背面も切妻屋根で、上下階とも内向きの座敷になっている。1階は縁側下屋を付け、2階中央は出窓、外壁は下見板張りとしている。土蔵との間は中庭にして落ち着いた佇まいを見せている。

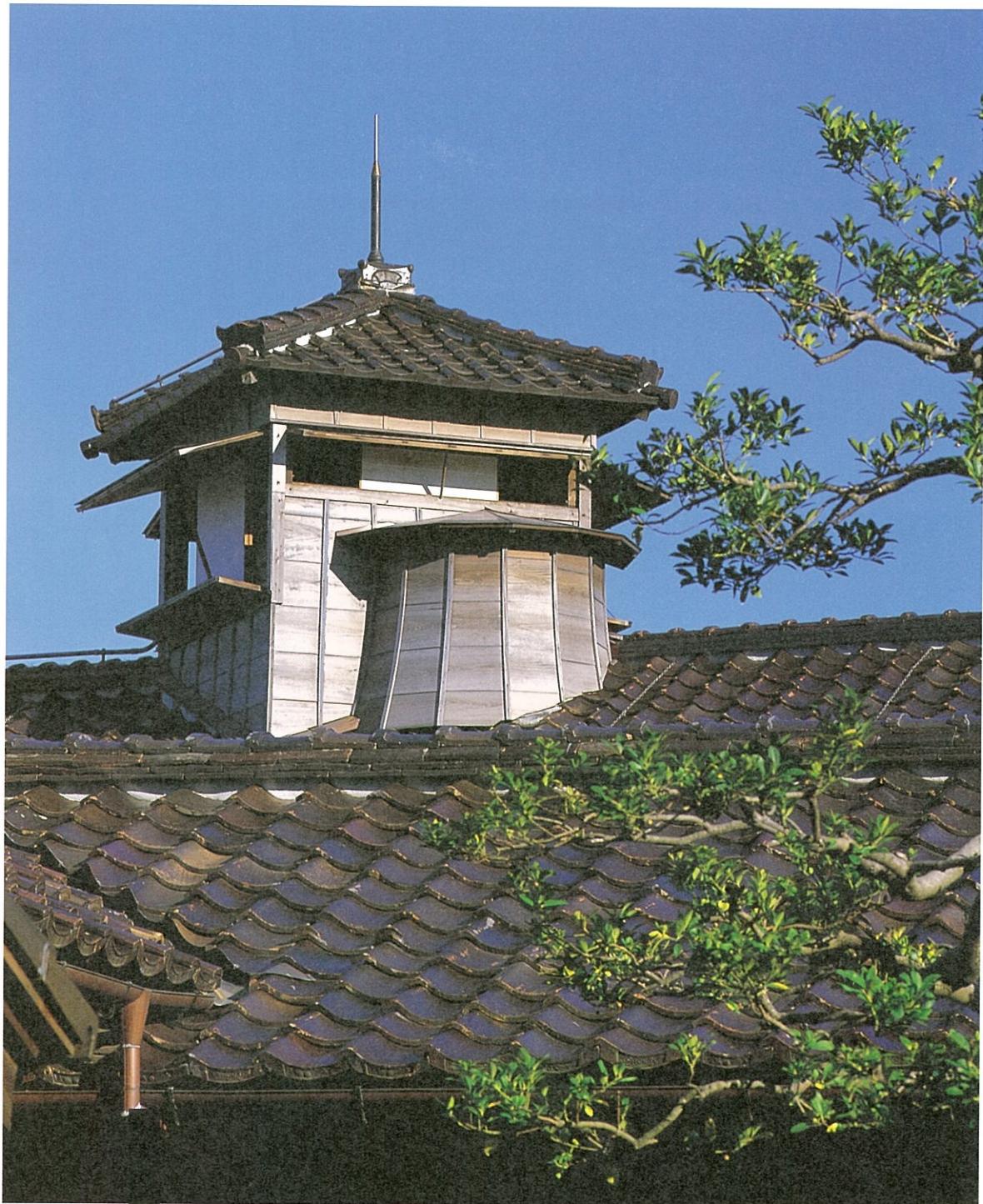




調度・衣装蔵から米蔵への渡り廊下は、主屋からの渡り廊下とは小屋組(屋根裏)の意匠を変え、湾曲した梁を用いて、棟束を立てずに棟木を受ける意匠的な構造になっている。また、右側は揚戸にして眺望を可能にしている。



主屋から調度・衣装蔵への渡り廊下は、上部を漆喰壁、下部を無節の腰板張りとし、化粧屋根裏には梁や棟木を入れず、垂木だけで持たせた蒲鉾型(アーチ型)の珍しい意匠を用いている。



建物に対して望楼は45度の角度に振つてあり、360度のパノラマが味わえるよう設計されている。障子窓の外には板戸があり、上下に突き上げると下の板が棚になる。屋根は宝形造り桟瓦葺き。



調度蔵と衣装蔵の間の戸前2階や、衣装蔵西側の渡り廊下2階(写真)には、畳を敷いて棹縁天井を張った数寄屋風の座敷がある。座敷から階段をのぼると望楼があり、望楼への控の間として使われた。





道路側は腰高い縦板張りの塀で囲むが、北面（写真左側）は、庭越しに海を眺望できるように低い築地塀になっている。主屋正面（上写真）は切妻造り妻入りで、前に同じ切妻の小屋根を付けている。入口のこけら葺きの土庇も意匠的である。